様式第２号

平成２６年度　　地 域 貢 献 特 別 研 究 費 実 績 報 告 書

平成２７年３月３０日

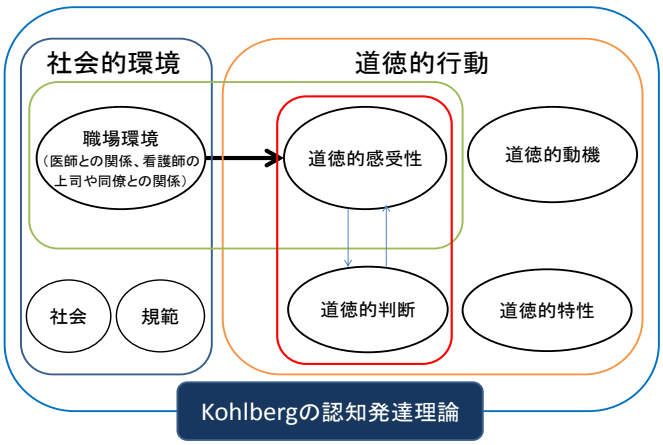
申　請　者	学科名	看護学科	職 名	教授	氏 名	山口　三重子　　印
調査研究課題	看護職者の道徳的感受性と道徳発達に関する縦断的研究					
交付決定額	310(千円)					

調査研究組織		氏　　名	所属・職	専門分野	役割分担
	代表	山口　三重子	看護学科	基礎看護学	研究統括
	分担者	産賀知子	重井医学研究所附属病院	慢性看護（腎透析）	調査票の開発と分析

調査研究実績の概要

（地域貢献への反映を踏まえて記述のこと）

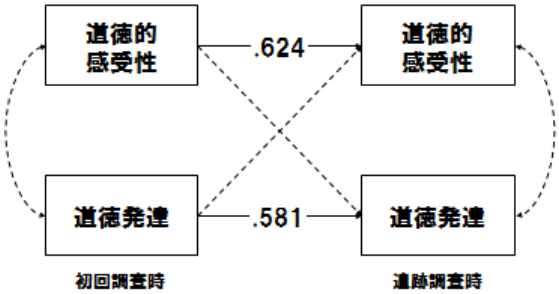
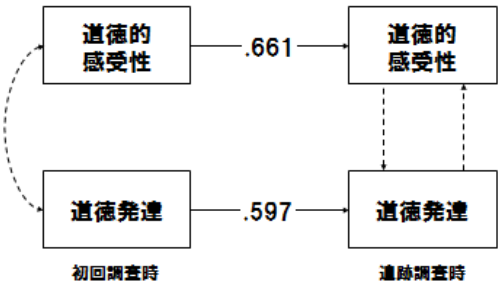
Kohlberg理論をもとに昨年度行った看護師の道徳的感受性と職場環境の関連（図１参照）の結果を本研究では縦断的研究としてさらに発展させ、道徳的感受性と道徳発達の因果関係を検討することを目的とした。縦断研究としての本研究では473名の内、同意の得られた対象者は57名であったが、最終的に47名から回答を得た。



女性44名(93.6%)、男性3名(6.4%)で、平均年齢は40.0歳であった。看護基礎教育は、専門学校35名（74.5%）、短期大学8名（17.0%）、4年制大学4名（8.5%）で、大学院前期課程修了者は1名であった。職位はスタッフ30名（63.8%）、主任14名（29.8%）、師長3名（6.4%）であった。勤務している病院規模は100床未満1名(2.1%)、100床以上200床未満17名（36.2%）、200床以上500床未満14名（29.8%）、500床以上15名（31.9%）であった。

今回使用した尺度は、Anne Skislandが開発した道徳的発達尺度(MDSP)と、Lützēn が開発したRevised Moral Sensitivity Questionneire(rMSQ)をもとに日本版に前田らが開発し

次頁に続く

調査研究実績の概要 （地域貢献への反映を踏まえて記述のこと）	た日本語版MSQ（J-MSQ）である。前田らの質問紙は、3つの因子の内一つの信頼係数が低く、質問項目の見直しが必要であったので、前田らの許可を得て構造方程式モデリングを用いて質問紙の信頼性妥当性を確認し、道徳的感受性を測定できるツールとして開発した。今回はさらに、Anne Skislandが開発した道徳的発達尺度(MDSP)の構成概念妥当性を検討の後、道徳的感受性との因果関係を検証することとした。 　道徳発達に関する調査項目は、Kohlbergが分類した項目の内、既に発達を遂げている小学生レベルの水準及び20代前半に関する水準は削除し、最高水準の項目を使用した。その理由は専門職看護師として既に働いているので、高い水準の調査項目を使用して道徳的感受性との因果関係モデルを検証する必要があると考えた。すなわち、「社会契約的な法律志向」「普遍的な倫理原則の志向」に関する項目を選択した。 　結果的に右の図２および図３に示したように、異なる方法で分析しても「道徳的感受性」と「道徳発達」の測定尺度はそれぞれを測定するものとしての構成概念妥当性を検証することができたが、道徳的感受性と道徳発達とは関連が認められず、それぞれが概念として独立したものであることがわかった。このことは、今後、道徳的感受性および道徳発達に影響を与える要因が何かを検討する課題が残された。さらにKohlberg理論を熟読するとともに、道徳的感受性を高める要因について、検討する必要性がある。 **図２　cross-lagged effects model** **交差遅延効果モデル**  n=46, CFI=1.000, RMSEA=0.000（推定法：ML） ※矢線は非有意な関連性を表す ※図の煩雑化を避けるため観測変数に付随する誤差変数および非有意なパス係数は省略した **図３　synchronous effects model** **同時効果モデル**  n=46, CFI=1.000, RMSEA=0.000（推定法：ML） ※矢線は非有意な関連性を表す ※図の煩雑化を避けるため観測変数に付随する誤差変数および非有意なパス係数は省略した

成果資料目録	なし